

雲仙温泉における明治期の 歴史資料の特殊性と その活用 ～国立公園の活性化のために～

国際文理学部環境科学科

国際環境政策コース

岡山 俊直

(okayama@fwu.ac.jp)

(Line ID: ncc71807)

自己紹介

- ・大分県出身
- ・九州大学農学部卒
- ・九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得退学（理学博士）
- ・九州大学医学部解剖学教室（1992-1993、福岡）
- ・インドネシア科学院生物学研究所（1999-2003、ジャカルタ）
- ・長崎県庁自然保護課（2004-2006、長崎）
- ・環境省地球環境局総務課国際戦略係（2006-2009、東京）
- ・国連環境計画アジア太平洋地域資源センター（2009-2011、バンコク）
- ・環境省災害廃棄物対策特別本部（2011-2013、東京&福島）
- ・福岡女子大学環境科学科（2013年10月～2017年3月、福岡）
- ・環境省復職（予定）（2017年4月～）

- 明治期から昭和初期まで、長崎—上海航路が存在した。当時、長崎は日本における中国大陸への窓口だった。
- そのため、当時、雲仙温泉は、長崎市内のみならず、上海、香港、ウラジオストック等、海外在住の西洋人のための避暑地として栄えた。
- これを雲仙温泉の「避暑地時代」という。

今日のお話

- 1) 雲仙が海外に広く知られるようになったきっかけ
- 2) 明治期の雲仙温泉における文章記録
- 3) 明治期の雲仙温泉における写真

結論

- 雲仙温泉は、**明治期の英文資料**が比較的豊富に残されている。
- 雲仙温泉は、**明治期の写真**が比較的豊富に残されている。
- これらは、他の温泉地・観光地には、なかなか見られない**雲仙温泉の大きな特徴**。
- これらのいわば**歴史資産を上手く活用**することは、温泉街や国立公園の活性化に寄与するのではないか？

「避暑地時代」を雲仙温泉の魅力と位置付け、活性化に利用するためには、「避暑地時代」を良く知らなければいけない。

国立公園「雲仙」指定50周年記念

雲仙の自然と歴史

昭和59年3月

長崎県

湯けむりの 記憶の

雲仙国立公園年表

西暦2000年(平成12年)記念

雲仙が海外に広く知られるようになったきっかけ

- “上海のノースチャイナ・デイリーニュースに雲仙の記事が掲載され、上海、香港からの避暑客が増加した”のは、**明治22年(1889年)**。
長崎県衛生公害研究所(1982)『長崎県温泉誌I』、26 より
- “**明治22年頃**には上海の新聞で雲仙の記事が掲載され、雲仙は避暑地を兼ねた温泉場として海外に知られるようになり”
長崎県(1984)『雲仙の歴史』、19 より
- “外誌、上海ノースチャイナ・デリー・ニュースに雲仙紹介される。外国からの避暑客が増えた。”のは、**明治23年(1890年)**。
長崎県(1984)『雲仙の歴史』、110 より
- “**1889年頃**、上海の英字新聞に雲仙の記事が載り、雲仙は避暑地を兼ねた保養温泉として海外に知られるようになり”
浅賀俊策(2004)「国立公園指定70周年を迎えた雲仙」、『国立公園』621、24-27
- “外紙「上海ノースチャイナ・デイリーニュース」に、避暑地としての雲仙が紹介されたのは**明治23年(1890年)**で、海外からの避暑客増加は雲仙に新しい文化である西洋文明をもたらした。”
九州地方環境事務所(2005)『雲仙天草国立公園 雲仙地域管理計画書』、2 より

UNZEN AND ROUND ABOUT IT.

The sulphur springs of Unzen, in the neighbourhood of Nagasaki, have been gradually growing into favour with Shanghai residents as a sanatorium during the hot weather, or as a convenient place to visit for a holiday, especially with those whose time is limited; and the attractions to the spot were greatly increased when it was known that a hotel had been erected in foreign style, and that the proprietor offered board and lodging to visitors on moderate terms. The journey to Nagasaki by steamer occupies just about as long as that to Chefoo, but has the advantage of costing less, as the fare is but \$30 for a return ticket available for four months. This year a good number of Shanghai residents visited Unzen, and the number bade fair to be largely increased, but unfortunately an earthquake occurred this year in the south of Japan that did some damage to Kumamoto, the capital of the province of Higo and about eighty miles from Nagasaki, the effects of which were telegraphed to Shanghai in a highly exaggerated form. The shock was felt at both Unzen and Nagasaki, and was the first that had been

1) 雲仙が海外に広く知られるようになったきっかけ

North China Herald紙の1889年9月28日号に「Unzen and round about it」と題するコラムを発見。

- ・紙面約2ページ分のコラム。
- ・その後、10月4日号、10月11日号、10月18日号と続き、全4回の連載となった(第2回から第4回までは、雲仙の周辺地域としての熊本県の紹介)。
- ・1891年には、全4回のコラムを加筆修正した上で、「Unzen and round about it; Including trip to Higo」と題するパンフレットとして出版。
- ・1903年に改訂第4版(今回までに確認できた最後の版)が出版。
- ・このパンフレットは、ノース・チャイナ・ヘラルド紙上において1919年まで広告が掲載。

「Unzen and round about it」
(North China Herald紙1889年9月28日号)の内容

- 明治22年熊本地震の影響について
- 長崎から雲仙への道程
- 温泉街と入浴施設やホテルについて
- 地獄について
- 周辺登山について
- その他

1) 雲仙が海外に広く知られるようになったきっかけ

「Unzen and round about it」 (North China Herald紙1889年9月28日号)の内容

○長崎から雲仙までのルート

- 1) 長崎から千々石まで人力車、千々石から山道で雲仙
- 2) 長崎から網場まで人力車、網場から船で小浜、小浜から山道で雲仙
- 3) 長崎から網場まで陸路、網場から船で千々石、千々石から山道で雲仙

○新湯には、4軒の建物があり、うち3つは和風の宿屋だが、1軒は外国人客専用の予約ができる。ここの風呂には、縦横約3.0×1.8m、深さ約60cmの石でできた浴槽があり、竹を使って源泉から温泉を引いている。温泉の予約は1日20セント、宿泊は1泊50セント。

「Unzen and round about it」
(North China Herald紙1889年9月28日号)の内容

- 上海からの旅行者の多くは、小地獄の下田ホテルに宿泊する。宿泊料は、短期間の場合1泊3ドル、1週間以上は1泊2.75ドル、14日以上は1泊2.5ドル、30日以上は1泊2ドル。
- 地獄をガイドなしに歩くのは危険。つい最近、長崎からの旅行者が地獄を歩いている際、地面の陥没で足に大やけどを負った。
- 大叫喚地獄を過ぎて、矢岳の尾根を越えて池の原に至る道はとても面白い。この道は、途中で、大量の蜜蜂を飼育している集落を通る。巣箱は、大きな石の上に置かれた竹細工でできている。蜂蜜を収穫する時は、煙で蜜蜂を巣箱から追い払い、大部分の巣を取り去り、僅かな量の巣だけを帰ってくる蜜蜂のために残す。

「Unzen and round about it」
(North China Herald紙1889年9月28日号)の内容

- 上海在住者が、雲仙の地元の人々の礼儀正しさと親切さに魅了されるであろうことは明らかである。地元の人々は、いろいろとうるさく聞いてくることはしない。私は全滞在中、一切の不快な言葉を聞かなかったし、微塵の無礼さもなかった。彼らは外国人に快適な滞在を提供することに本当の喜びを感じているようにみえる。
- 私の滞在中、古湯で祭りが開かれた。数百人の人々が、相撲を見るために村の神社に集まった。そこで、多くの群衆の中、私は即座に良い席に通され、すこしも苛立つことがなかった。こういった地元の人々の対応は、中国におけるそれとどれほど大きく違うことか。

「Unzen and round about it」 (North China Herald紙1889年9月28日号)の内容

- 全体の約1/6程度が、**明治22年熊本地震**に関する記述。
- 本コラムの著者は、小地獄のホテルにおいてかなり注意深く地震の影響を調べた上で、ホテルの建物に全く地震の被害が無いことを非常に強調。
 - ・今年、熊本で起こった地震について、上海では非常に誇張されて伝えられている。雲仙において実質的な被害はないにもかかわらず、雲仙のホテルは倒壊し、深刻な被害を受けている、という噂が広がった。そのため、上海では雲仙は危険な場所であるという認識が広まり、雲仙行きを取りやめた者もいる。(抄訳)
 - ・私は、最近の修理跡がないか、ホテルを注意深く調べてみたが、そのような跡は全く見つからなかった。ホテルの建物は全く健全であり、堅固であった。地震は、旅行者を警戒させたが、実際のところ、ホテルには地震による影響は全く無い。(抄訳)

明治22年熊本地震と雲仙温泉について調べてみた

Earthquake in Japan.

The following account of the Kumamoto earthquake appeared in the *Shanghai Mercury* of August 17, written by a resident of that place who was, at the time, stopping at the Shimod Hotel, Unzen:—

“I was sitting reading in my bedroom in the hotel on the night of the earthquake. It was an unusually close and oppressive night for Unzen, considering the great height of the site, over 3,000 feet above sea level. A most terrific noise startled me at about 11.30, and all at once the furniture, &c., began to move about the room, the floor of which swayed under my feet. My first thought was to catch the lamp which was sliding off the table, lest it should fall and set the house on fire and add a new horror to the night, for I have had experience of an earthquake before in Manila, and realised what had occurred in a moment. I seized the lamp and blew it out, and then went to the door, the posts of which I had to hold to pre-

1898年11月23日のThe Telegraph (Brisbane)に掲載された記事(冒頭部分のみ)。明治22年熊本地震が発生した際、小地獄の下田ホテルに宿泊していた客の手記。著者は、“日本人は取り乱してもいないし、恐れているようにも見えない”としながらも、地震を恐れて急遽雲仙から長崎に戻っている。

明治22年熊本地震と雲仙温泉について調べてみた

“SHIMODA HOTEL,” KO-JI-GOKU, UNZEN.

THE proprietor of the above Hotel begs to inform Residents and Visitors that the various reports of his premises having been seriously damaged by the recent earthquake are incorrect. On the contrary, he is pleased to be able to state that no material damage whatever was sustained, and business is being carried on as heretofore.

Nagasaki, August 6th, 1889.

3m.

1889年8月のThe Rising Sun and Nagasaki Expressに掲載された広告。雲仙の下田ホテルにおいては、広まっている噂に反して、明治22年熊本地震における被害は無いことを訴えている。



風評被害があったらしい

このコラムは、明治22年熊本地震による雲仙温泉における風評被害払拭のために書かれたものではないか？？？

このコラムの前後

- ・1884年(明治17年)8月2日号のザ・ライジング・サン・アンド・ナガサキ・エクスプレス紙においては、「Unzen and Obama」と題する記事で、“長崎は港の魅力に反して街周辺に魅力的な場所が少ない。在住者は、新しく来た人から「どこを見ればいだろう？」と聞かれてしばしば答えに窮する。そのため、長崎を去る者は、港は魅力的だが、長崎には港以外、他に見るべきものがない、という印象を持つ。”と前書きした上で、“しかし、雲仙と小浜を見ないのは後悔の元だ”と続けている。→明治17年当時、雲仙温泉は、長崎在住の西洋人の間でそれほど有名ではなかったようだ。
- ・1889年(明治22年)8月10日号のノース・チャイナ・ヘラルド紙において、“popular resort Unzen”という記述が見られる。→「Unzen and round about it」の頃には、すでに上海在住西洋人の間で雲仙温泉がリゾート地として知られていた。
→雲仙温泉が西洋人の間である程度有名になったのは、明治20年前後のことらしい。
- ・1889年(明治22年)9月28日号の「Unzen and round about it」以前には、ノース・チャイナ・ヘラルド紙において、雲仙温泉に関するまとまった記事は発見されなかった。一方で、これ以降は、同紙において雲仙温泉における旅行記等が掲載されるようになる(1890年10月10日、1891年9月25日、1898年10月10日等)。
→上海においては、「Unzen and round about it」というコラムによって、雲仙温泉の知名度が高まったことは事実のようだ。

雲仙が海外に広く知られるようになったきっかけ

- 上海および長崎在住の西洋人の間で雲仙温泉が広く知られるようになったのは、1887年(明治20年)前後らしい。
- 雲仙温泉において、上海等海外からの避暑客が増加するきっかけとなったのは、ノース・チャイナ・ヘラルドの1889年(明治22年)9月28日号に掲載された「Unzen and round about it」と題するコラム。
- このコラム以降、ノース・チャイナ・ヘラルドにおいては雲仙温泉の旅行記等の記事が増える。またこのコラムは、パンフレットとして出版され、以後30年以上に渡って販売され続けた。
- このコラムは、元々、明治22年熊本地震による雲仙温泉における風評被害払拭のために書かれたものであったが、結果として上海の西洋人社会に雲仙を広く知らしめる結果となった可能性がある。

2) 明治期の雲仙温泉における文章記録

表 3種の資料における新湯地区の主な西洋人向けホテルの創業年

年		参考文献3) (1926)	参考文献6)表5 (1984)	参考文献7) (2004)
1890	明治23年		温泉	
1894	明治27年	亀の家*		
1896	明治29年	温泉		
1897	明治30年	高来	高来	
1903	明治36年		有明	
1906	明治39年	九州 有明		有明
1907	明治40年	富貴屋	新湯 日ノ出**	
1908	明治41			新湯
1913	大正2年			九州
1914	大正3年			高来
1915	大正4年		富貴屋	
1917	大正6年		九州	

* 亀の家ホテルは、温泉ホテルの前身とされる

** 日ノ出ホテルは、富貴屋ホテルの前身とされる

温泉街の景観に大きな影響を与える西洋人向けホテルの創業年は資料によってバラバラ

なぜ雲仙温泉の西洋人向けホテルの創業年は、資料によってバラバラなのだろうか？



調べてみよう！

雲仙温泉の「避暑地時代」に関する主な文献（和文）

雲仙温泉を主とした(もしくは含む)旅行ガイドブック等

- 金井俊行（1893）『温泉案内記』 金井俊行
久保天随（1901）『紀行文集檜木笠』 博文館
中川観秀（1909）『温泉小浜案内記：登山記念』 長崎新聞社
村松セツ（1909）『通俗 温泉案内記』 村松セツ
関善太郎（1912）『嶋原半嶋風光記：附・小浜温泉案内』 大黒屋
-
- 上野喜太郎（1917）『島原温泉案内記』（稿本、長崎歴史文化博物館蔵）
津田繁治編（1919）『長崎県温泉公園案内：附・島原大変略記(再版)』 津田繁治
松川二郎（1923）『療養遊覧 山へ海へ温泉へ』 大成社
杉村廣太郎（1924）『雲仙嶽を繞りて』 温泉公園発展会
関善太郎（1926）『雲仙小浜風光記：附・嶋原半島案内』 草野謹一書店
園孝治郎（1926）『雲仙岳と島原半島』 雲仙社
園孝治郎（1926）『世界之樂園 雲仙岳』 雲仙社
藤原徳一（1926）『雲仙岳の研究』 長崎雲仙研究会
田村剛（1926）『登山の話』 文化生活研究社
上野節夫（1927）『雲仙』 雲仙岳後援会
津田繁治編（1927）『長崎県温泉公園案内：附・島原大変略記(六版)』 津田繁治
鉄道省（1935）『日本案内記 九州編』 博文館
橋本喜造（1939）『國立公園雲仙大觀』 大洋社

和文資料を読み込んだ結果・・・

現在、**雲仙温泉の「避暑地時代」の歴史を語る際の底本**となっているのは、以下の3点であると判断した。

金井俊行(1893):『温泉案内記』金井俊行.

上野喜太郎(1917):『島原温泉案内記』(稿本、長崎歴史文化博物館蔵).

園孝治郎(1926):『雲仙岳と島原半島』雲仙社.

雲仙温泉の「避暑地時代」に関する主な文献（和文）

雲仙温泉を主とした(もしくは含む)旅行ガイドブック等

金井俊行（1893）『温泉案内記』 金井俊行

久保天随（1901）『紀行文集檜木笠』 博文館

中川観秀（1909）『温泉小浜案内記：登山記念』 長崎新聞社

村松セツ（1909）『通俗 温泉案内記』 村松セツ

関善太郎（1912）『嶋原半嶋風光記：附・小浜温泉案内』 大黒屋

上野喜太郎（1917）『島原温泉案内記』（稿本、長崎歴史文化博物館蔵）

津田繁治編（1919）『長崎県温泉公園案内：附・島原大変略記（再版）』 津田繁治

松川二郎（1923）『療養遊覧 山へ海へ温泉へ』 大成社

杉村廣太郎（1924）『雲仙嶽を繞りて』 温泉公園発展会

関善太郎（1926）『雲仙小浜風光記：附・嶋原半島案内』 草野謹一書店

園孝治郎（1926）『雲仙岳と島原半島』 雲仙社

園孝治郎（1926）『世界之樂園 雲仙岳』 雲仙社

藤原徳一（1926）『雲仙岳の研究』 長崎雲仙研究会

田村剛（1926）『登山の話』 文化生活研究社

上野節夫（1927）『雲仙』 雲仙岳後援会

津田繁治編（1927）『長崎県温泉公園案内：附・島原大変略記（六版）』 津田繁治

鉄道省（1935）『日本案内記 九州編』 博文館

橋本喜造（1939）『国立公園雲仙大観』 大洋社

雲仙温泉の「避暑地時代」に関する主な文献（英文）

新聞記事

North China Herald

Nagasaki Express

Rising Sun and Nagasaki Express

その他

雲仙温泉を含む旅行ガイドブック等

W. H. Sston Karr ? (1888?) 『Handy Guide Book to the Japanese Islands』

Basil Hall Chamberlain and W. B. Mason (1891 - 1913) 『A Handbook for Travellers in Japan』
2nd ~9th

The Welcome Society (1905) 『A Short Guide-book for Tourists in Japan』

F. Boehm (1906) 「Journey in the Land of the Rising Sun」 『The Far East』1(2), 56-73, The
Shanghai Mercury

The Welcome Society (1907) 『A Guide Book for Tourists in Japan』

雲仙温泉への旅行記（雑誌の記事）

A. G. J. (1898) 「Unzen, Japan, as a summer resort for missionaries」 『China Recorder and
Missionary Journal』29(1), 331-334

全て明治期の文献

英文資料を読んで分かったのは・・・

雲仙温泉に関する明治期の和文資料は、僅かしかないが、英文資料は比較的豊富に存在する！ これは西洋人で栄えた雲仙温泉の大きな特徴ではないか！

明治30年以前の英文資料における雲仙温泉の外国人向けホテルに関する記述

- ・『A Handbook for Travellers in Japan』2nd (1884、明治17)
萬屋、上田屋 (いずれも小地獄もしくは古湯)
- ・「Unzen and round about it」(1889、明治22)
上田屋、下田ホテル (いずれも小地獄もしくは古湯)
- ・『A Handbook for Travellers in Japan』3rd (1891、明治24)
萬屋、上田屋、下田ホテル (いずれも小地獄もしくは古湯)
- ・『A Handbook for Travellers in Japan』4th (1894、明治27)
下田ホテル、萬屋、上田屋 (いずれも小地獄もしくは古湯)
"Shinyu consisting of 3 inns and some bath-houses with a private bath"
→ 明治27年時点で新湯には、外国人向けホテルは無かった。
- ・「Unzen, Japan, as a summer resort for missionaries」(1897、明治30)
“宿泊施設は3つのクラスから選ぶことができる”
 - 1) “大きな外国人向けホテルが3つ(雲仙ホテル、高来ホテル、新湯ホテル)ある。
うち雲仙ホテルが間違いなく最上” → 明治30年には、新湯に外国人向けホテルができていた。
 - 2) “いくつかの準外国人向けホテルがある。うち上田屋、新湯ホテル、湯元、および小地獄の緑屋が良い”
 - 3) “日本風の宿屋は多くある”

今回の研究で発見された新湯地区における各ホテルの最も古い記録

- **高来ホテル**（明治30年（1897））
The Nagasaki Express 記事（1897年9月16日）
The Nagasaki Press 広告（1897年9月）
- **温泉ホテル**（明治30年（1897））
The Rising Sun and Nagasaki Express 広告（1897年5月）
North China Herald 記事（1897年7月9日）
- **新湯ホテル**（明治30年（1897））
A. G. J. (1898) 「Unzen, Japan, as a summer resort for missionaries」『China Recorder and Missionary Journal』29(1), 331-334 に記述あり
- **富貴屋ホテル**（明治37年（1904）もしくは明治40年（1907））
上野喜太郎（1913）『島原温泉案内記』に記述あり
* 1904年10月と1907年5月に雲仙温泉を訪問した際の記録。
- **有明ホテル**（明治40年（1907））
The Nagasaki Press 広告（1907年7月）
- **九州ホテル**（明治42年（1909））
中川観秀（1909）『温泉小浜案内記: 登山記念』長崎新聞社 に広告あり

表 雲仙温泉新湯地区におけるホテルの創業年

年	長崎県(1984)『雲仙の歴史』 (P48、表5)	本研究によって得られた 各ホテルの最も古い記録 *
明治20(1887)	岩木屋	
23(1890)	温泉ホテル	
27(1894)		新湯地区にホテル無し
29(1896)		
30(1897)		新湯ホテル 温泉ホテル 高来ホテル
36(1903)	有明ホテル	
38(1905)		
40(1907)	新湯ホテル 日ノ出ホテル	有明ホテル 富貴屋ホテル
42(1909)		九州ホテル
大正4(1915)	富貴屋	
6(1917)	九州ホテル	

* あくまでも今回の研究で発見した各ホテルの最も古い記録であり、実際の創業年は、より古い可能性がある。 30

表 雲仙温泉新湯地区におけるホテルの創業年

年	長崎県(1984)『雲仙の歴史』 (P48、表5)	本研究によって得られた 各ホテルの最も古い記録 *
明治20(1887)	岩木屋	
23(1890)	温泉ホテル	
27(1894)		新湯地区にホテル無し
29(1896)	日清戦争終結	
30(1897)		新湯ホテル 温泉ホテル 高来ホテル
36(1903)	有明ホテル	
38(1905)	日露戦争終結	
40(1907)	新湯ホテル 日ノ出ホテル	有明ホテル 富貴屋ホテル
42(1909)		九州ホテル
大正4(1915)	富貴屋	
6(1917)	九州ホテル	

* あくまでも今回の研究で発見した各ホテルの最も古い記録であり、実際の創業年は、より古い可能性がある。 31

文献から分かった事をまとめると・・・

表 雲仙温泉における『避暑地時代』の成立過程

年号	主なできごと	「避暑地時代」の中心
明治10年 (1877)以前	<ul style="list-style-type: none"> ・高島炭鋳の技師ブラウンが古湯の上田屋に宿泊(安政年間) ・2人のイギリス人が取り押さえられ、長崎奉行所に護送(慶応3年) ・米国海軍将校7名が古湯の湯元旅館に宿泊(明治3年) 	古湯
明治11年(1878)	新湯開発	
明治20年 (1887)頃	<ul style="list-style-type: none"> ・小地獄に下田ホテル創業 ・上海および長崎在住の西洋人の間で雲仙温泉の知名度が高まる 	小地獄
明治22年 (1889)	新聞コラム「Unzen and Round About It」によって、上海で雲仙温泉が広く知られるようになる	
明治28年(1895)	日清戦争終結	
明治30年 (1897)頃	新湯の中心に3つのホテル (新湯ホテル、温泉ホテル、高来ホテル)がほぼ同時に開業	
明治38年(1905)	日露戦争終結	
明治39年(1906)	下田ホテル焼失	新湯
明治40年 (1907)頃	新湯に新たに3つのホテル (有明ホテル、富貴屋ホテル、九州ホテル)がほぼ同時に開業	
大正年間以降	<ul style="list-style-type: none"> ・小地獄の緑屋ホテルが新湯に移転 ・古湯の湯元旅館や加勢屋旅館が「日本客専門」になる 	

さらに・・・

- 1914年(大正3年)に鉄道院から発行された『東亜案内日本編』によると、当時のホテルは、東京に6つ、横浜に7つ、神戸に8つ、長崎に5つ、雲仙には7つ(有明ホテル、雲仙ホテル、高来ホテル、新湯ホテル、富貴屋ホテル、九州ホテル、大正ホテル)が記載されている。
- 長崎の5つのホテルは、既に全て廃業している。また、東京・横浜で残っているのは帝国ホテル、神戸で残っているのはオリエンタルホテルだけである。
- 対して、雲仙温泉においては、新湯ホテル、九州ホテル、有明ホテル、富貴屋ホテルが、現在でも同じ場所で営業を続けている。高来ホテルは、場所と屋号を変えて、いわき旅館として健在である(大正ホテルは開業しなかった可能性が高い)。創業100年を超えるホテルが、一ヶ所にこれだけ残っている場所は、温泉地に限らず日本中探しても他に無い。**雲仙温泉は、「創業100年超のホテルが集まる日本唯一の街」**なのである。これ自体が、雲仙温泉の大きな財産である。このことは、観光のために大いにアピールすべきではないか？

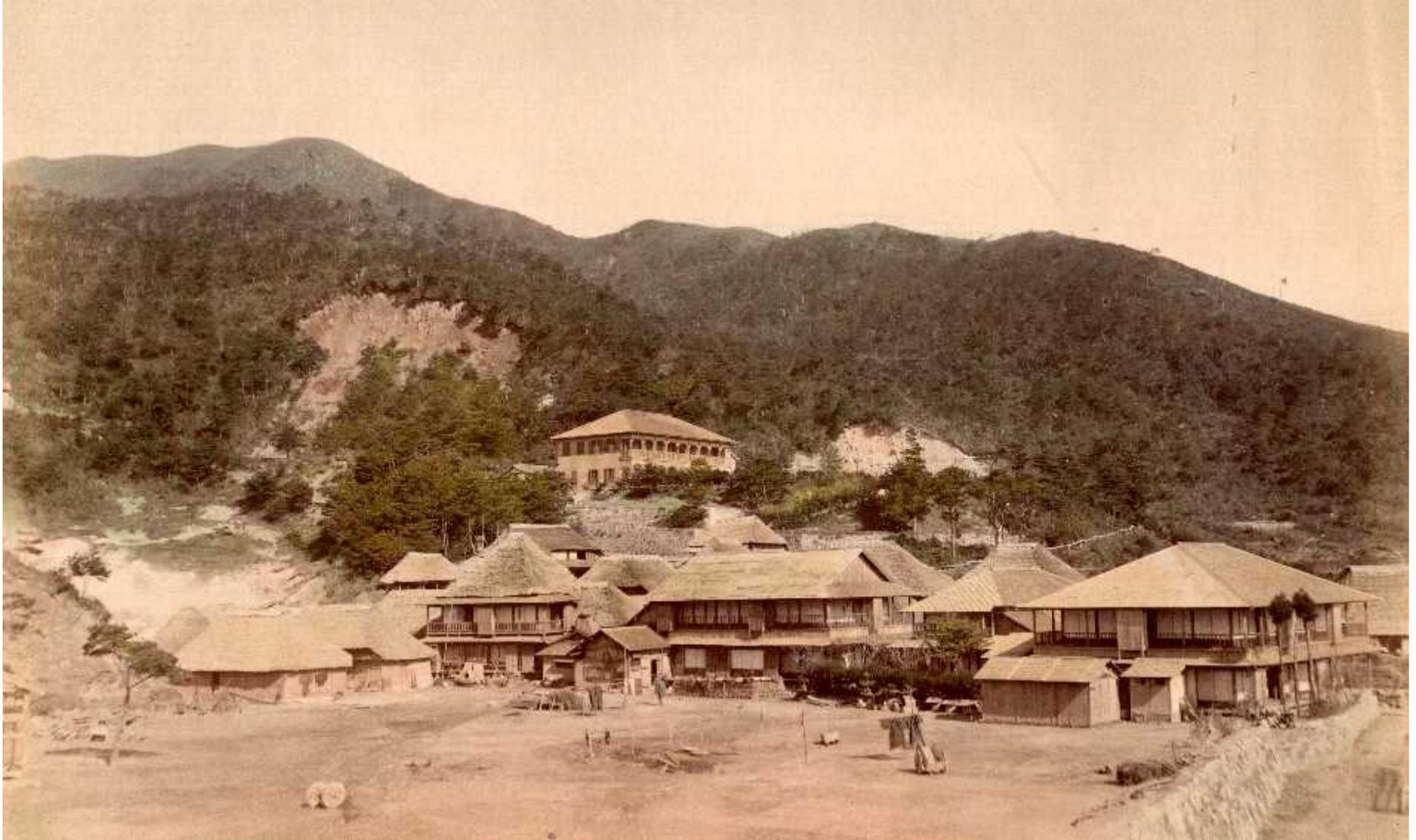
ついでに・・・英文資料から読み取れる雲仙温泉の歴史 (ごく一例)

- 1884(明治17)年 公衆浴場の入浴料は地元民は1回1銭、旅行者は1日60銭。学校ではわずかながら英語を教えている。
- 1889(明治22)年 ホテルの宿泊料は短期なら1泊3ドル。
- 1891(明治24)年 台風被害が発生、下田ホテルの屋根が飛ぶ。
- 1893(明治26)年 茂木から小浜には蒸気船が運行されているが信頼性が低いので、通常は網場から小型船に乗る。
- 1894(明治27)年 温泉街で盗難事件が発生、被害は金時計。
- 1898(明治31)年 小地獄のベーカリーは、美味しいパンと金比羅岳の牧場からの素晴らしいミルクを提供している。
- 1912(大正元)年 ゴルフ場はほぼ完成しているが、現在グリーンの造成中。
- 1915(大正4)年 140人の外国人と50人の日本人が、第1次大戦1周年の会合を開く。
- 1919(大正8)年 ゴルフ場のフェアウェイとグリーンの状態を辛辣に批判する新聞読者の投書。
- 1926(大正15)年 日本郵船が上海にて雲仙の宣伝映画の上映会を主催。

まとめ

- 現在、雲仙温泉の「避暑地時代」の歴史を語る際の底本となっているのは、金井(1893)、上野(1914)、園(1926)の3点であることが判明した。
- 雲仙温泉の新湯地区では、日清戦争の終結(1895年)後、第一段階として中心部の3つのホテル(温泉ホテル、新湯ホテル、高木ホテル)がほぼ同時に開業し、これが新湯地区における本格的な「避暑地時代」の始まりとなった。その後は日露戦争の終結(1905年)がきっかけとなって、周辺のホテルが開業した可能性が示唆された。
- 雲仙温泉には明治期の英文資料が比較的豊富に存在する。これは西洋人で栄えた歴史を持つ雲仙温泉の大きな特徴**である。また、既に地元でも忘れ去られた情報が英文資料の中に多く眠っている。今後、研究する価値がありそうだ。
- 雲仙温泉は、「創業100年超のホテルが集まる日本唯一の街」**である。このことは、観光のために大いにアピールすべき。雲仙温泉の「避暑地時代」を強くアピールすることは、国内のみならず中国を含めたアジア各国からの旅行客増に貢献するのではないか。

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(26.5 cm × 20.5 cm、鶏卵紙プリント)

100年以上経ってるとは思えない鮮明さ！

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(26.5 cm × 20.5 cm、鶏卵紙プリント、部分拡大)

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(26.5 cm × 20.5 cm、鶏卵紙プリント、部分拡大)

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(26.6 cm × 21.4 cm、鶏卵紙プリント)

極めて鮮明であると同時に、今を知る人にとっては、驚きの風景

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(25.8 cm × 19.7 cm、鶏卵紙プリント)

地味な写真ですが・・・地獄が動いているのが良く分かります⁴⁰

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(26.7 cm × 20.7 cm、鶏卵紙プリント)

57号線がまだ無い！

さらに、
ドイツの古書店でこんな
モノが見つかったっ！！！！

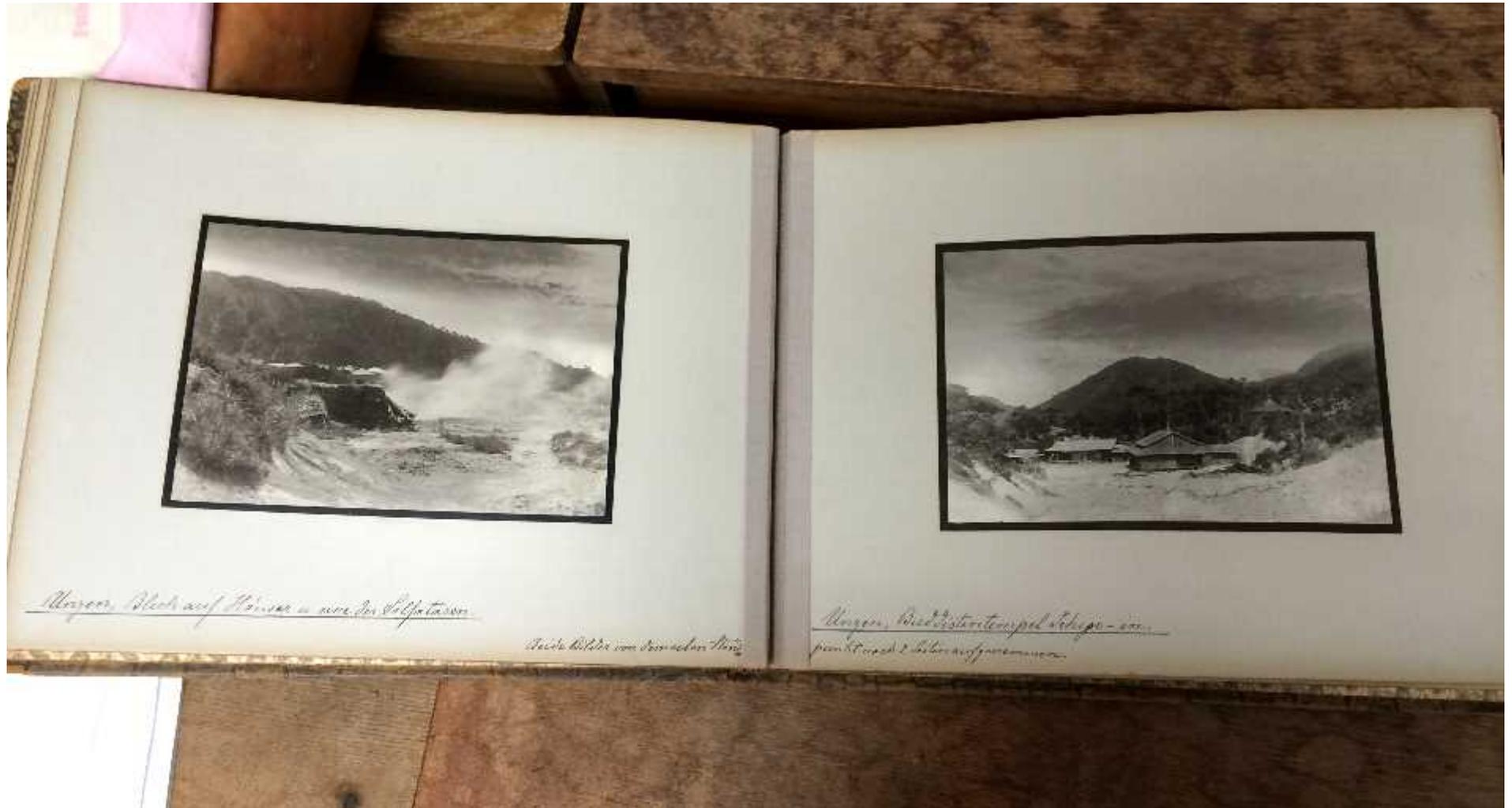
Japan 1899

3) 明治期の雲仙温泉における写真



『Japan 1899』
1899(明治32)年に雲仙温泉を訪問したドイツ人の個人アルバム

3) 明治期の雲仙温泉における写真



『Japan 1899』。誰も見たことが無い貴重な雲仙の風景のオンパレード。こんな写真が残っている観光地／温泉地って、首都圏／奈良・京都を除くとどれだけあるだろう???

『Japan 1899』より



下田ホテル。敷地内からの近撮は初めての発見。

『Japan 1899』より



この時代の庶民の子供のスナップなんて・・・日本中にどれだけ残ってるだろう？



どうも温泉神社の鳥居ができる前のようです。

- これら明治期の雲仙温泉の写真は、国内最大の古写真データベースである『長崎大学古写真データベース』や90冊近い明治期の写真アルバムを収蔵している国際日本文化研究センターの古写真データベースにも無い。
- また、これらの写真を現地のビクターセンターや地元の人々に見てもらったところ、非常に驚かれた。つまり、これらの写真の存在は、地元でも知られていない。
- 明治期の英文資料が豊富に残っているというのは、「避暑地時代」を擁する雲仙温泉の大きな特徴の一つだが、**この時代の写真が多く残っているというのも雲仙温泉の大きな特徴**ではないか？
- もしそうなら、他の温泉地もしくは国立公園と差別化して、雲仙をアピールできるのではないか？

明治期の雲仙温泉の写真について

- ①アマチュア写真師が撮影した写真
- ②横浜写真(お土産写真)
- ③絵葉書

- * 絵葉書については、大正期に大ブームが起こり、それに伴って日本全国の観光地や景勝地の絵葉書が発売されるようになったが、明治期の絵葉書は比較的稀。
- * ②や③は、主に西洋人向けのお土産として売られていたという性質上、当時西洋人が良く訪れていた土地の物が主。九州で②が残っているのは長崎市内、雲仙温泉、および長崎市内から雲仙温泉への途上だけと思われる。
- * ①～③が残されている日本の街は、それほど多くない。
- * つまり、明治期の写真が比較的豊富に残っている雲仙温泉は、日本の温泉地・観光地としてもかなり例外的。これは雲仙温泉の大きな特徴。
- * なお、これまで雲仙温泉の明治期の写真があまり知られていなかったのは、①～③がもっぱら海外に流出しており、国内にほとんど残ってないため。

結果1 写真の分類

3) 明治期の雲仙温泉における写真

1) キャプションが「**アルファベット＋算用数字＋全て大文字の表題**」

- ・Bennett (2006)は、これらを「Unidentified Number Groups」に分類し、撮影者を特定していない。
- ・森(2014)は、頭のアルファベットがAで始まる物は明治23年の晩秋から明治24年の初頭に、Bで始まる物は明治31年の夏に、GとHで始まる物は明治20年～明治31年の間に小川一真スタジオによって撮影された物と推定している。
- ・高橋(2016)は、これらの写真は、長崎と神戸に写真館を開業していた為政写真館の撮影と推測している。
→現時点では、これらの写真の撮影者(スタジオ)は未詳

2) キャプションが「**算用数字(1100番台)＋全て大文字の表題**」

- ・Bennett (2006)によると、江崎礼ニスタジオの作品と思われる。

3) キャプションが「**算用数字(200番台)＋全て大文字の表題**」

- ・Bennett (2006)によると、江南信國スタジオの作品と思われる。

4) キャプションが「**全て大文字の表題**」

- ・これらのキャプションはいずれも「撮影対象, 地名.」となっており、撮影対象と地名の間にカンマが入り、最後にピリオドが付く。森(2014)は、これらを初期の小川一真スタジオの撮影と推測している。
→現時点では、これらの写真の撮影者(スタジオ)は未詳

5) **キャプションの無い物** → ???

A195 UNZEN KOJIGOKU AT NAGASAKI.



A 195 UNZEN KOJIGOKU AT NAGASAKI.

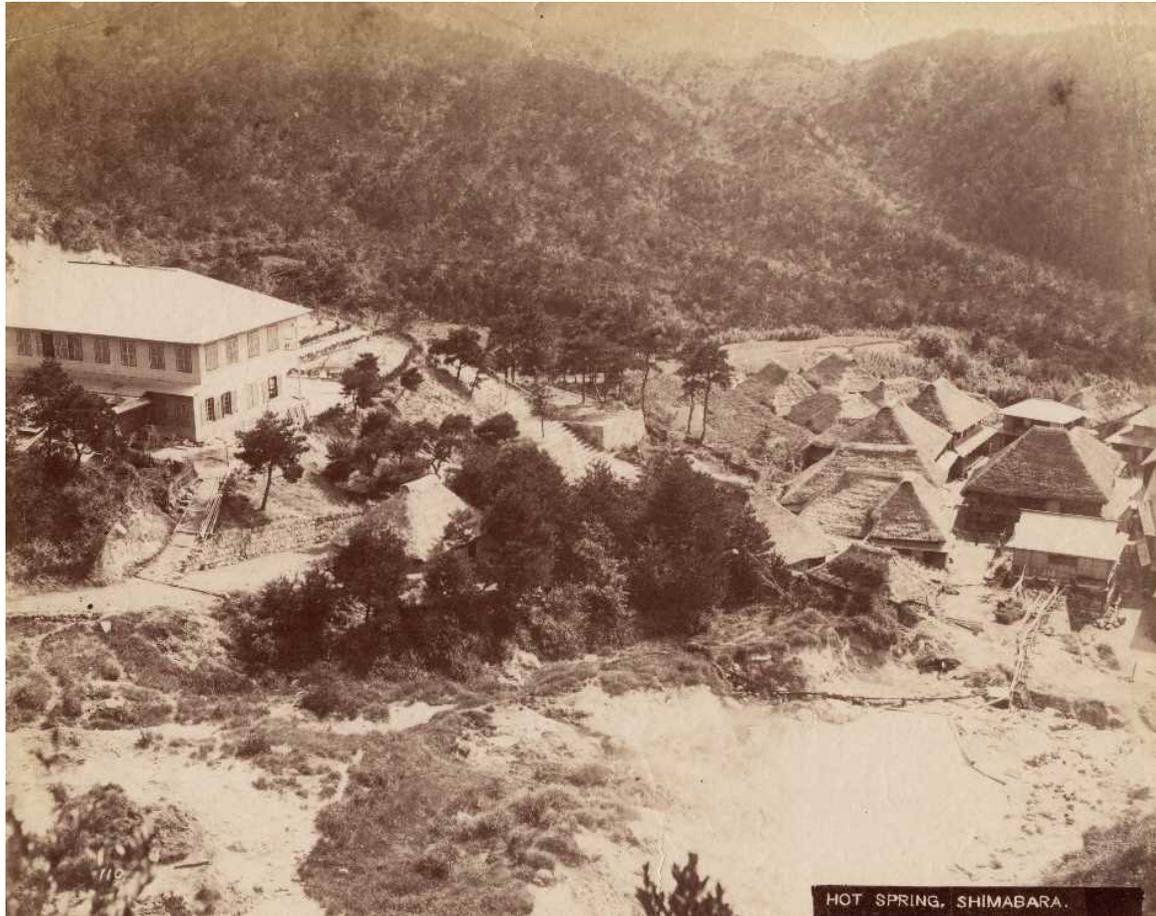
スイス連邦工科大学チューリヒ校図書館のデジタルアーカイブより (ETH-Bibliothek Zürich, Bildarchiv / Fotograf: Unbekannt / Ans_05282-056-AL-FL/
Public Domain Mark)

結果2 既存の誤情報の訂正

3) 明治期の雲仙温泉における写真



上:A159の部分拡大、下:現在のゆやど雲仙新湯裏の斜面から北側を撮影。白円は温泉神社の社殿。つまりこの写真は小地獄ではなく、新湯。



- “小地獄は20家族程が住む村だが、狭苦しい場所にあり、家屋も密集しているので、滞在に適した場所ではない。”(明治17年、下田ホテル創業前と思われる)
- “小地獄には新しい外国人向けホテルがあり、上海からの旅行者の多くは、このホテルに宿泊する。ただし、残念なことにこのホテルは立地が良くない。このホテルは、源泉より標高の高い場所に位置するため、村の喧騒を見下ろすことになると同時に、入浴するにはバケツで温泉をホテルにくみ上げるしかない。村から300ヤード程度下った場所にホテルを作れば、温泉の問題は解決すると同時に、より良い景観が得られたことだろう。”(明治22年)⁵³



○“新湯には、4軒の建物があり、うち3つは和風の宿屋だが、中心にある1軒は清潔で綺麗な浴場であり、外国人客専用の予約ができる。(明治22年)



○“新湯には、4軒の建物があり、うち3つは和風の宿屋だが、中心にある1軒は清潔できれいな浴場であり、外国人客専用の予約ができる。(明治22年)

『Japan 1899』より



- 昭和7年の地図によると、高岩山は、山全体がミヤマキシリマ群落（長崎県、『雲仙岳大観』）
- 「高岩山は山腹のツツジが有名である」（昭和26年）

『Japan 1899』より



○「避暑地時代」西洋人は、この風景を見て、高岩さんを「ロッキー・ヒル」と呼んでいた。

『Japan 1899』より





○「かく高き山の絶頂に広き牧あるも奇妙の地なり」(橘南谿、1780年代)

『Japan 1899』より



○温泉街から見える山々が森に覆われたのは、昭和以降らしい

明治20年代



明治32年



○「雲仙温泉における西洋人環境は、明治30年前後に大きく変わる。」、「明治30年前後には、新湯地区の中心部に3つの西洋人向けホテルがほぼ同時に創業し、雲仙温泉における西洋人環境は、小地獄の2つのホテルに加えて、新湯に拡大した。」（岡山、2016）



「下田ホテルのベランダから見た小地獄の民家の風景、右奥に日本人カメラマンの家」

“雲仙における写真の元祖は、島原の中島氏である”（関善太郎(1912)『鳴原半嶋風光記』大黒屋）。



明治32年の時点で、高来ホテルと雲仙ホテルは建物が洋館であるのに対して、新湯ホテルは洋館ではなく、和風の建物。

3) 明治期の雲仙温泉における写真



(香港で発行された絵葉書)

明治30年代の雲仙温泉新湯地区の風景

まとめ

- 雲仙温泉は、古い時代の文献資料と画像資料が豊富に残されている。コンパクトな温泉街の中に、過去130年間の古写真を含めた1,300年に渡る歴史・文化情報が詰まっているのである。雲仙温泉は、スマートフォンによる拡張現実を利用したフィールドミュージアムの設計に最適な土地ではないだろうか。
- 明治前半の様子が文献と写真でたどれる温泉は、日本全国を探してもそれほど多くないと思われる。これらの資料を活用して、まずは地元の人々が、自らの歴史資料の価値を認識し、それを上手に観光客に伝えることによって、雲仙温泉の魅力は更に高まるのではないだろうか。

結論

- 雲仙温泉は、明治期の英文資料が比較的豊富に残されている。
- 雲仙温泉は、明治期の写真が比較的豊富に残されている。
- これらは、他の温泉地・観光地には、なかなか見られない**雲仙温泉の大きな特徴**。
- これらのいわば**歴史資産を上手く活用**することは、温泉街や国立公園の活性化に寄与するのではないか？